

万木の城址ひんがし(東)に  
夷隅の川をみんなみ(南)に  
つとめいそしむまなびやは

常磐木茂ける舟岡の  
景勝の地に建てられぬ

これはかつての国吉小学校  
の一番である。誰が作詞し  
作曲したのか。知らないが  
初期に制作されたことだけ  
間違いないようだ。歌詞は  
の曲に七五調による

その曲譜はここに掲げる  
る余地はないが、さす  
がに時代感や響きを伝  
えず、荘重な響きを伝  
えるものである。

この校歌は、むかし  
学校行事の際、いつか  
国歌「君が代」と併唱し  
され、うたうと併唱し  
しおの感が与えられた  
のだった。馴染めな  
く、既に歌われな  
なつてから相当年月がたつて

終戦以来早くも二十年。世の中  
も学校教育も大いに変わった。  
から新らしい時代には、それ  
ツチした新しい校歌が要求さ  
れるのは当然である。う。それ  
あらぬか知らないが、ほのか  
聞くところによると、新校歌の

◇町内学校巡り

巻の國小吉国

(1) 余木令一

制定が計画されて、現われる。  
そのか、もちろんわからない。  
来の「荘重」に代つて、はつら  
つとした歌詞に明かるいメロデ  
イがその大いなる特色をなす  
であろうと想像するだけだ。  
嘗ては、立派な校歌としてこ  
に学ぶ人々に愛唱され、親しま  
れたもの、唄の文句を真似る  
ちやないが、時世という

字にや勝てやせぬで、破  
れゾーリの如く捨てられ  
やがては唯だ、うつつろな  
形骸だけを残し、学校歴  
史の語り草として、僅か  
に記録の一頁を埋めるた  
けに止まるのではなかる  
うか。

「人生は短かし、されど  
芸術は永し」と、西洋哲  
人の言葉にいつわりない  
よう祈りつつも、消えゆ  
く古い校歌に対する挽歌  
のつもりで、国吉小学校  
の背景をうたつたこの歌詞の意  
義を、いましばらくたずねて  
みようと思う。

(つづく)

